

<福島第一原子力発電所プラント状況等のお知らせ>

(日報：平成 25 年 7 月 27 日 午後 3 時現在)

平成 25 年 7 月 27 日
東京電力株式会社
福島第一原子力発電所

福島第一原子力発電所は全号機（1～6号機）停止しています。

1号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 12 日午後 3 時 36 分頃、直下型の大きな揺れが発生し、1号機付近で大きな音があり白煙が発生しました。水素爆発を起こした可能性が考えられます。
- 平成 23 年 12 月 10 日午前 10 時 11 分、給水系配管からの注水に加え、炉心スプレイ系注水配管から原子炉への注水を開始しました。
現在の注水量は給水系配管から約 $2.4\text{m}^3/\text{時}$ 、炉心スプレイ系注水配管から約 $1.9\text{m}^3/\text{時}$ です。
- 平成 23 年 4 月 7 日午前 1 時 31 分、原子炉格納容器内へ窒素ガスの注入を開始しました。
- 平成 23 年 8 月 10 日午前 11 時 22 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。
- 平成 23 年 11 月 30 日午後 4 時 4 分、原子炉圧力容器へ窒素封入操作を開始しました。
- 平成 23 年 12 月 19 日午後 6 時、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運用を開始しました。
- 平成 25 年 7 月 9 日午前 10 時 25 分、サプレッションチェンバにおける残留水素の排出、およびサプレッションチェンバ内の水の放射線分解による影響を確認するため、窒素ガス封入を開始しました。

2号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 15 日午前 6 時頃に圧力抑制室付近で異音が発生、同室の圧力が低下しました。
- 平成 23 年 9 月 14 日午後 2 時 59 分、給水系配管からの注水に加え、炉心スプレイ系注水配管から原子炉への注水を開始しました。
現在の注水量は給水系配管から約 $1.9\text{m}^3/\text{時}$ 、炉心スプレイ系注水配管から約 $3.4\text{m}^3/\text{時}$ です。
- 平成 23 年 5 月 31 日午後 5 時 21 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。
- 平成 23 年 6 月 28 日午後 8 時 6 分、原子炉格納容器内へ窒素ガスの注入を開始しました。
- 平成 23 年 10 月 28 日午後 6 時、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運用を開始しました。
- 平成 23 年 12 月 1 日午前 10 時 46 分、原子炉圧力容器へ窒素封入操作を開始しました。
- 平成 25 年 4 月 1 日午前 0 時、原子炉建屋排気設備の調整運転において異常が見られないことから、本格運用に移行しました。
- 平成 25 年 7 月 22 日午前 10 時 10 分、サプレッションチェンバから原子炉格納容器への気体流出の有無の確認およびサプレッションチェンバ内の残留水素の有無を確認するため、原子炉格納容器内へ窒素ガス封入を開始しました。

3号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 14 日午前 11 時 1 分頃、1号機同様大きな音とともに白煙が発生したことから、水素爆発を起こした可能性が考えられます。
- 平成 23 年 9 月 1 日午後 2 時 58 分、給水系配管からの注水に加え、炉心スプレイ系注水配管から原子炉への注水を開始しました。
現在の注水量は給水系配管から約 $2\text{m}^3/\text{時}$ 、炉心スプレイ系注水配管から約 $3.5\text{m}^3/\text{時}$ です。
- 平成 23 年 6 月 30 日午後 7 時 47 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。
- 平成 23 年 7 月 14 日午後 8 時 1 分、原子炉格納容器内へ窒素ガスの注入を開始しました。
- 平成 23 年 11 月 30 日午後 4 時 26 分、原子炉圧力容器へ窒素封入操作を開始しました。

- ・平成24年3月14日午後7時、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運用を開始しました。

4号機（廃止）

- ・平成23年3月15日午前6時頃、大きな音が発生し、原子炉建屋5階屋根付近に損傷を確認しました。
- ・平成23年7月31日午後0時44分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。

5号機（定期検査で停止中）

- ・安全上の問題がない原子炉水位を確保しています。
- ・平成23年3月19日午前5時、残留熱除去系ポンプを起動し、使用済燃料プールの冷却を開始しました。
- ・平成23年7月15日午後2時45分、残留熱除去海水系ポンプ（B系）による残留熱除去系（B系）の運転を開始しました。
- ・平成24年5月29日午前10時33分、これまで機器ハッチを開口することにより行っていた原子炉格納容器内の排気について、原子炉格納容器内より直接行うため、震災以降停止していた原子炉格納容器排気ファンを起動しました。その後、影響は確認されなかったことから平成24年6月1日午前10時30分、連続運転を開始しました。
- ・平成24年8月29日午後1時、補機冷却海水系ポンプ（A）の復旧作業が完了し、本格運用を開始しました。これにより3台の補機冷却海水系ポンプが復旧しました。
- ・残留熱除去海水系ポンプ（A）および（C）の復旧作業が完了し、平成24年8月30日午前11時33分、残留熱除去系（A）を起動しました。運転状態に異常がないことから、残留熱除去系（A）の本格運用を開始しました。これにより、本設の残留熱除去系はA系とB系の両系統が復旧しました。

6号機（定期検査で停止中）

- ・安全上の問題がない原子炉水位を確保しています。
- ・平成23年3月19日午後10時14分、残留熱除去系ポンプを起動し、使用済燃料プールの冷却を開始しました。
- ・平成23年9月15日午後2時33分、原子炉は残留熱除去系、使用済燃料プールは補機冷却系および燃料プール冷却系、各々の系統による冷却を開始しました。
- ・平成24年5月15日午後2時20分、これまで機器ハッチを開口することにより行っていた原子炉格納容器内の排気について、原子炉格納容器内より直接行うため、震災以降停止していた原子炉格納容器排気ファンを起動しました。その後、影響は確認されなかったことから平成24年5月18日午後2時12分、連続運転を開始しました。

その他

- ・平成23年6月13日午前10時頃、2、3号機スクリーンエリアに設置した循環型海水浄化装置の運転を開始しました。
- ・平成23年6月17日午後8時、水処理設備において滞留水の処理を開始しました。また、7月2日午後6時、水処理設備による処理水を、バッファタンクを經由して原子炉へ注水する循環注水冷却を開始しました。
- ・平成23年8月19日午後7時41分、セシウム吸着装置から除染装置へのラインと第二セシウム吸着装置の処理ラインの並列運転による滞留水の処理を開始しました。
- ・平成23年10月7日午後2時6分、伐採木の自然発火防止や粉塵の飛散防止を目的とした構内散水を、5、6号機滞留水浄化後の水を利用し、開始しました。
- ・地下水による海洋汚染拡大防止を目的として、平成23年10月28日、1～4号機の既設護岸の前面に海側遮水壁の設置に関する工事に着手しました。
- ・平成23年12月13日午後0時25分、淡水化装置（逆浸透膜式）において、淡水化処理後の濃

縮水発生量の抑制を目的とした、再循環運転による運用を開始しました。

- ・ 所内共通ディーゼル発電機（B）については、これまで復旧作業を進めてきましたが、平成24年12月26日午前0時、所内共通ディーゼル発電機（A）に加えて、保安規定第131条に定める異常時の措置の活動を行うために必要な所内共通ディーゼル発電機として運用開始しました。
- ・ 平成25年3月30日午前9時56分、多核種除去設備（ALPS）の3系統（A～C）のうちA系統において、水処理設備で処理した廃液を用いた試験（ホット試験）を開始しました。
平成25年6月13日午前9時49分、多核種除去設備（ALPS）B系統において、水処理設備で処理した廃液を用いた試験（ホット試験）を開始しました。
- ・ 平成25年7月1日、地下貯水槽の汚染水は全て移送を終了していますが、拡散防止対策およびサンプリングは継続して実施中です。

<拡散防止対策>

7月26日および7月27日、地下貯水槽 No. 1～3の漏えい検知孔内に漏えいした水を仮設地上タンクへ、地下貯水槽 No. 1, 2のドレン孔内に漏えいした水を当該地下貯水槽内へ移送する処置を実施しました。

6月19日より、地下貯水槽 No. 1 検知孔水（北東側）の全ベータ放射能濃度の低下が緩やかであることから、地下貯水槽 No. 1 にろ過水または淡水化装置（RO）処理水（全ベータ放射能濃度：約 1×10^4 Bq/cm³）を移送し希釈する処置を開始しました。（地下貯水槽 No. 1 内残水の全ベータ放射能濃度： 6.6×10^4 Bq/cm³）。

最新の希釈作業実績：7月25日、約60m³の淡水化装置（RO）処理水を注水。

6月27日より、地下貯水槽 No. 2 検知孔水（北東側）の全ベータ放射能濃度の低下が緩やかであることから、地下貯水槽 No. 2 にろ過水または淡水化装置（RO）処理水（全ベータ放射能濃度：約 1×10^4 Bq/cm³）を移送し希釈する処置を実施しました。

最新の希釈作業実績：7月25日、約70m³仮設タンクへ移送。

7月24日より、地下貯水槽 No. 3 検知孔水（南西側）の全ベータ放射能濃度の低下が緩やかであることから、地下貯水槽 No. 3 にろ過水または淡水化装置（RO）処理水（全ベータ放射能濃度：約 1×10^4 Bq/cm³）を移送し希釈する処置を実施しました。

最新の希釈作業実績：7月24日、約40m³の淡水化処理水を注水。7月26日、約40m³仮設タンクへ移送。7月27日、約60m³のろ過水を注水。

<サンプリング実績>

7月26日、地下貯水槽 No. 1～7のドレン孔水（14箇所）、地下貯水槽 No. 1～4, 6の漏えい検知孔水（10箇所のうち2箇所は試料採取不可）、地下貯水槽観測孔（22箇所）についてサンプリングを実施しました。分析結果については、前回（7月25日）実施したサンプリングの分析結果と比較して大きな変動は確認されませんでした。

- ・ 1～4号機タービン建屋東側に観測孔を設置し地下水を採取、分析しており、平成25年6月19日、1, 2号機間の観測孔において、トリチウムおよびストロンチウムが高い値で検出されたことを公表し、監視を強化しております。

今回新たに掘削した地下水観測孔 No. 2-1（地下水観測孔 No. 2 の東側）の7月25日に採取した水のトリチウムの測定および以下の測定を実施しました。今回新たに掘削した地下水観測孔 No. 2-1 採取水のトリチウム測定結果は、近傍にある地下水観測孔 No. 2 と比較して低い値でした。その他の測定結果については前回と比較して大きな変動は確認されませんでした。

<地下水観測孔 No. 2-1 以外の測定>

- ・ 地下水観測孔 No. 1、No. 1-2、No. 1-3、No. 1-4、No. 2 のトリチウム（7月22日採取分）
- ・ 地下水観測孔 No. 1、No. 1-2、No. 1-3、No. 1-4、No. 2、No. 3、No. 3-1 のガンマ核種および全ベータ（7月25日採取分）
- ・ 港湾内海水のトリチウム（7月22日、23日採取分）
- ・ 港湾内海水の一部である1～4号機取水口内北側海水、1・2号機取水口間海水（表層・下層）のガンマ核種および全ベータ（7月25日採取分）
- ・ 地下水観測孔 No. 1-2 のろ過後のガンマ核種（7月25日採取分）

海側トレンチ内高濃度汚染水の汚染源の特定などの調査の一環として、新たに観測孔を設置した2号機取水電源ケーブルトレンチ（B1-1：海水配管基礎部）の7月26日に採取した水のガンマ核種、全ベータおよび塩素濃度の測定を実施しました。2号機海水配管基礎部の測定結果は、新たな観測点であり、直接比較できるものではないが、7月17日に採取した近傍の取水電源ケーブルトレンチ（7月17日採取分：塩素 70ppm、セシウム 134 1,200万 Bq/L（1万2

千 Bq/cm³)、セシウム 137 2,400 万 Bq/L (2 万 4 千 Bq/cm³)、全ベータ 2,300 万 Bq/L (2 万 3 千 Bq/cm³) と比較して、高い値 (塩素 8,000ppm、セシウム 134 7 億 5 千万 Bq/L (75 万 Bq/cm³)、セシウム 137 16 億 Bq/L (160 万 Bq/cm³)、全ベータ、7 億 5 千万 Bq/L (75 万 Bq/cm³) でした。なお、平成 23 年 4 月に発生した 2 号機取水口スクリーン室への漏えい水の濃度と比較すると同程度 (平成 23 年 4 月の 2 号機取水口スクリーン付近から漏えいした汚染水の性状：セシウム 134 18 億 Bq/L (180 万 Bq/cm³)、セシウム 137 18 億 Bq/L (180 万 Bq/cm³) の値でした。

- 平成 25 年 6 月 27 日午後 2 時 27 分、セシウム吸着装置においてセシウム吸着材の一部を現在使用しているもの (H ベッセル) より高性能のもの (EH ベッセル) に変更し、その有効性を確認するため、セシウム吸着装置を起動し、第二セシウム吸着装置 (サリー) との並列運転を開始しました。
- 平成 25 年 6 月 30 日午前 0 時、入退域管理施設の運用を開始しました。
- 平成 25 年 7 月 5 日、原子炉注水系信頼性向上対策として、復水貯蔵タンク炉注水系による 1～3 号機原子炉注水の運用を開始しました。
- 平成 25 年 7 月 18 日午前 8 時 20 分頃、瓦礫撤去作業前のカメラによる現場確認において、3 号機原子炉建屋 5 階中央部近傍 (機器貯蔵プール側) より、湯気らしきものが漂っていることを協力企業作業員が確認しました。なお、主要プラント関連パラメータ (原子炉格納容器・圧力容器の温度および圧力、キセノン濃度)、モニタリングポストおよび連続ダストモニタの値に有意な変動はありませんでした。その後、同日午前 9 時 20 分に未臨界維持を確認しました。また、3 号機原子炉建屋使用済燃料プール養生上部の雰囲気線量の測定結果については、日々作業前に実施している線量測定値と比較して大きな変動はありませんでした。同日実施した 3 号機原子炉建屋上部原子炉上北側 (2 回実施) と原子炉上北東側のダストサンプリング結果は、いずれの値も過去半年間の変動範囲内に収まっています。この測定結果およびこれまでのプラント状況の確認結果により、湯気の発生原因は雨水がウェルカバーのすき間から入って、格納容器ヘッド部にて加温されたことによるものと推定しております。7 月 19 日午前 7 時 55 分、湯気らしきものが漂っていた当該部をカメラで確認したところ、湯気らしきものは確認されませんでした。また、同日、当該部付近の温度測定を実施した結果、20.8℃～22.3℃ (午後 1 時 44 分～午後 2 時 54 分) の範囲でした。なお、外気温度は 21.4℃ (午後 1 時 40 分現在) および 20.1℃ (午後 3 時現在) でした。引き続き、状況を注視してまいります。7 月 20 日、3 号機原子炉建屋上部原子炉上北側において、3 回目、4 回目のダストサンプリングを実施するとともに、あわせて、原子炉上北東側 (定例で実施しているサンプリング箇所) のダストサンプリングを実施し、いずれの値も前回 (7 月 18 日) の測定結果と比較して同等かそれ以下の値であり、過去半年間の変動範囲内に収まっていることを確認しました。また、同日午後 0 時 39 分～午後 2 時 40 分にかけて当該部付近の赤外線サーモグラフィ測定を実施し、湯気らしきものが出ている付近の温度が約 18℃～25℃であり、同日の気温とほぼ同程度であることを確認しました (参考：7 月 20 日午後 2 時時点 気温：21.4℃ 湿度：76%)。7 月 23 日午前 9 時 5 分頃、カメラにて、再度当該部に湯気を確認しました。同日午前 9 時 30 分時点のプラント状況、モニタリングポストの指示値等に異常は確認されておりません。その後、湯気は断続的に見えていましたが、午後 1 時 30 分から午後 2 時 30 分において確認されなかったことから、湯気が確認されなくなったものと判断しました。同日 7 月 23 日、湯気の確認された当該部付近 (シールドプラグ全体) の 25 箇所の放射線線量率測定を実施した結果、最大値が 2,170mSv/時、最小値 137mSv/時であり、湯気が確認された箇所の放射線線量率は 562mSv/時であることを確認しました。7 月 24 日午前 4 時 15 分頃、3 号機原子炉建屋 5 階中央部近傍 (機器貯蔵プール側) より、再度、湯気が発生していることをカメラにて確認しました。なお、同日午前 5 時までに確認したプラント状況、モニタリングポストの指示値に異常は確認されておりません (原子炉注水、使用済燃料プール冷却は安定的に継続。モニタリングポストや圧力容器温度、格納容器温度、ドライウェル圧力、希ガスモニタの値。また、午前 4 時 20 分時点の気象データは、気温 18.3℃、湿度 91.2%)。同日午前 4 時 40 分から午前 6 時 4 分に当該部付近の赤外線サーモグラフィ測定を実施し、湯気が出ている部位の温度は約 30℃～34℃で、シールドプラグの繋ぎ目付近の最大値は約 25℃であることを確認しました。結果としては、前回測定値 18℃～25℃ (7 月 20 日測定) より高い値であるが、これは、当該部の測定高さを前回より近づけて測定したことによる

測定精度の違いによるものです。7月24日午後0時30分から午後1時30分にかけて、当該の3号機オペフロ上部にて、7月23日にシールドプラグ周辺の25箇所で行った霧囲気線量測定を追加として、再度、霧囲気線量測定を行っており、結果については最も低い箇所で633mSv/時、最も高い箇所で1,860mSv/時であることを確認しました。

7月18日以降、3号機原子炉建屋5階中央部近傍（機器貯蔵プール側）より、湯気が漂っていることを確認したことについて、その後の詳細検討により、以下のメカニズムにより湯気が発生している可能性があると考えており、今後、瓦礫撤去等を含む線量低減を実施した上で温度、線量測定等を行い、評価の妥当性を検証していく予定です。このため7月26日午後1時、瓦礫撤去作業を再開しました。なお、3号機原子炉建屋上部を含めた敷地各所の線量・ダスト測定による評価を定期的に行っており、当該の湯気自体も環境に与える影響は敷地全体に対して小さいものとなっております。今後、瓦礫撤去等の作業に伴い再び湯気が発生が確認された場合は、プラントパラメータおよびモニタリングポストを確認し、プラント状態の未臨界およびその他に異常のないことを確認します。

〈湯気発生メカニズム〉

シールドプラグの隙間から流れ落ちた雨水が原子炉格納容器ヘッドに加温されたことによるもののほか、原子炉圧力容器、原子炉格納容器への窒素封入量（約16m³/時）と抽出量（約13m³/時）に差が確認されていることから、この差分（約3m³/時）の水蒸気を十分含んだ気体が原子炉格納容器ヘッド等から漏れている可能性が考えられ、これらの蒸気がシールドプラグの隙間を通して原子炉建屋5階上に放出した際、周りの空気が相対的に冷たかったため蒸気が冷やされ、湯気として可視化されたものと推定されます。

なお、7月23日、7月25日に測定された線量率の最も高い箇所（シールドプラグ北側）、および比較対象地点としてシールドプラグ中央部、機器貯蔵プール西側のダスト測定を実施し、各箇所ともに過去の原子炉建屋5階上部のダスト測定値の範囲内であることを確認しました。

- 平成25年7月23日午前6時40分頃、6号機非常用ディーゼル発電機（B）本体の動弁注油タンク下のトレンチ内に油が漏れいしていることを、パトロール中の当社社員が発見しました。現場の確認を行ったところ、油漏れの範囲は約5m×約5m×約1mmであり、油補給弁が微開となっていたことから、直ちに油補給弁を閉としました。また、同日午前7時5分、富岡消防署に連絡しております。富岡消防署による現場確認の結果、危険物の漏えい事象であると判断されました。その後、床面に漏れいた油の拭き取りを完了しております。なお、油の漏えいは1滴/3秒で継続していますが、ドレンパンにて油を受けております。同日7月23日、当該の動弁注油タンクの油を抜き取り適正なレベルに調整しました。7月24日、油の漏えいが停止していることを確認しました（漏えい量は約25リットル）。
- 平成25年7月25日午後2時18分、3号機タービン建屋地下から集中廃棄物処理施設（雑固体廃棄物減容処理建屋〔高温焼却炉建屋〕）へ溜まり水の移送を開始しました。
- 平成25年7月26日午前10時33分、2号機タービン建屋地下から3号機タービン建屋地下へ溜まり水の移送を開始しました。

以上